

# マロリーワイズ症候群

私は元來が酒呑みである。しかしもう若くはないのだからと、このところ節酒に努めてきた。だが八十歳を超えてしばらくしてから、再び今度はより強い酒癖が戻ってきた。子供はもとより孫さえもみんな社会人となり、この頃はもう寄り付くこともなくなつた。そのうえ、五十年連れ添つた妻が昨秋みまかり孤老の身をかこつている。孤独を癒したいという潜在欲求のためであろう、酒量がにわかに加えつた。

しばらく前、深更にいたるまで適量を相当超える酒を流し込んでそのまま呆けたように眠り、翌朝起床したのだが、何とも名状しがたい強い二日酔いに襲われた。頭痛はもとよりだが、五臓がねじ曲げられるように苦しい嘔吐に波状的に襲われた。トイレに座り込み手洗いの便器を抱え込んで嘔吐を繰り返した。

次いで便器に座り込んだのだが、相当量の下血である。はつと驚いているうちに嘔吐のほうが鮮血に変わり、生きた心地がしない。近くに住まう娘に電

## 渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。横浜大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任。二〇〇〇年十二月退任。二〇一七年六月より現職。

話しことの次第を告げるや、娘は直ちに救急搬送を依頼、数分後には救急グループが到着、救急車に乗せられて近くの大病院にたどり着き、早朝にもかかわらず一連の検診を手際よく施してくれた。

翌々日の朝、検診の結果を伝えられたのだが、実にあつけに取られるほどの軽傷であつた。病名は「マロリーワイズ症候群」だという。ウエブで検索してみると、「繰り返し返す激しい嘔吐のために食道が広がろうとする圧力がかかり、胃と食道のつなぎ目の粘膜が裂けて出血する病」とある。

ドクターからは、「よくある症状ですよ。一週間の安静で完治します。お酒はほどほどに」

といわれ、診察室のソファアにへたり込んだ。入院の六日間を終えて帰宅。このエッセイをしたためている。こんな話『Voice』の巻末エッセイに書いていいものかどうかとも思うけれど、私のように高齢でありながら強い酒癖の人々が、私の周辺にも決して少なくない。同好の諸氏、ご注意あれ。